

## 【②見方や考え方について—B:授業をつくる教師の視点】

### ■柔軟な粘土、困難な粘土

人気のある粘土工作だが、その理由として、自由度が高いこと、多少のゆがみも気にならなくてすむからだと思われる。反面、表現的な向上のために難しい技に挑戦しなくても、そこそこの形になるため、目標意識の低い「遊び」になりかねない。これを避けるためにテーマや素材に「困難」を与え、そこでの創造性を活性させて、達成感を体験させる課題を検討した。

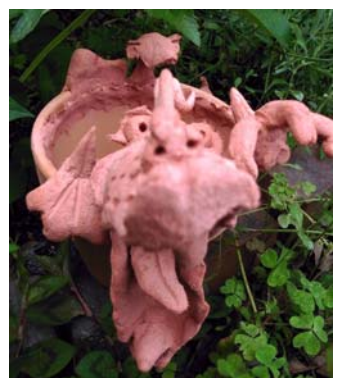
地元愛知県は瀬戸物に代表される焼き物が伝統的工芸品として根づいている。そこで素焼きの植木鉢（5号：高さ16cm）と素焼き調粘土（自然乾燥だけで堅固になるタイプ約1,700g）、この二つの同じ素材を使って作品づくりをした。テーマは「おどろいた顔」。素材への関心を強くするために材料を触らせながら、焼き物づくりのストーリーを短くレクチャーした。

地球の土、人が形にする、炎で焼く、手にして使う、劣化する、土に還る。今、手にしている粘土は地球そのもの、地球をこねているというイメージを動機づけにした。

同じ素材でありながら、堅い鉢と柔らかい粘土、この相反する塊をどのように使いこなすのが今回の課題の要点となる。事前に、注意点として以下を伝えた。

- ①鉢は粘土の台や入れ物として使うものではないこと。
- ②3週で完成させるため粘土は次回には堅くなるので、形成を予測して毎時終了すること。

本課題は年長児から5年生の授業で行った。低学年生においては鉢と粘土を接着する時に水が必要なこと、鉢が水分を含むと粘土と同じ赤茶色になることに気がつく子がいた。また、高学年生では鉢の形状を観察し、底の部分を正面に生かしたり、側面を粘土が貫通した様子工夫したりする子もいて、堅い粘土という制約を乗り越えて多様に表現することができていた。



しんかいけいぞう  
(新海敬造：名古屋市 こども造形教室ダ・ヴィンチ講師)